

へちま

池松 孝子

正岡子規は三十四歳の若さで生涯を閉じた。その亡くなる前日に詠まれた三句を「絶筆三句」と呼んでいる。その日、力尽きた様子の子規を弟子の河東碧梧桐や家族が支えて筆を持たせたという。

糸瓜咲きて痰のつまりし仏かな

痰一斗糸瓜の水も間に合はず

をととひのへちまの水も取らざりき

子規の命日は九月十九日でこの三句に因んで「糸瓜忌」と言われる。また、子規の数多い俳号の一つ「獺祭書屋主人」から「獺祭忌」とも。獺（かわうそ）が自分の獲物を川岸などに並べる習性を言うが、子規の枕元は参考書が散らかっていたからだという。

長く伸びたへちまの茎を切り、切り口をコップなどの容器に差し込む。数日でへちま水が採れる。このへちま水に去痰作用があるというのだ。そのため結核を病む子規の家の庭にはかなりの数、植えられていた。ちなみにへちまを季語に詠んだ俳句を探すとその中には子規を詠んだものもかなりある。

へちまはその実から繊維が採れることで糸瓜（いとうり）の名がついた。インド原産と言われる。若い果実は繊維が未発達で柔らかく食用になる。台湾で食した小籠包の具にも入っていた。沖縄、南九州でも煮物、みそ汁の具にするそうだ。

晩秋、茶色に熟した実を水に晒す。皮や果肉が少しずつ腐敗していく。数日後、荒い繊維質だけ残して乾かすとスポンジ状のたわしになる。また通気性のいいことから靴の中敷き、ぞうりにすることもあったという。沖縄ではへちまのことを「ナーベラー」と呼ぶそうで、鍋を洗うのに使った「鍋洗い」から来ている。

今やグリーンカーテンはゴーヤに置き換わっているが、以前は縁側や庭に植えられているへちまをよく見かけたものだ。食用だけでなく様々な用途を知ると、日常生活に欠かせない植物だったことがわかる。

かつては日本の輸出農産物に落花生、しょうが、へちまがあったという。千九百年のパリ万国博では、日本館の宣伝にへちまで作った大きな象を展示したという。